

## 《特集記事》

## 四万十川における自然再生・保全と地域連携

中村河川国道事務所

工務第一課 矢野泰敏

## 1. はじめに

中村河川国道事務所における四万十川自然再生事業で実施している、地域と連携した取り組みについて紹介します。

## 2. 1 四万十川自然再生事業の概要

四万十川は周囲の山々を背景にゆったりと流れ、下流域では清らかな流れ（青）、自然豊かな川岸（緑）、目にしみる砂州（白）が調和した美しい景観がみられ、日本有数の自然豊かで懐かしいふるさとも感じられる自然環境が保たれてはいるものの、一方で農業形態の変化、砂利採取などの要因によりアユ等の魚類・動植物の生育環境や水質・透明度の悪化などの課題も指摘されている。



そこで、四万十川では、昭和30年代の四万十川の原風景の復活を目指し、「ツル」、「アユ」、「アカメ」、「ヤゴ」に着目し、瀬と淵の再生、湿地の再生、ワンドや池の整備、樹木・植物の管理・保全などの自然再生事業を平成14年度から実施しており、現時点では、「ツルの里づくり」及び「アユの瀬づくり」の2事業について現地施工を実施している。また、自然再生事業は、樹木の伐採や湿地の再生による河床掘削により流下能力を向上させるなど治水面においても効果のある事業である。

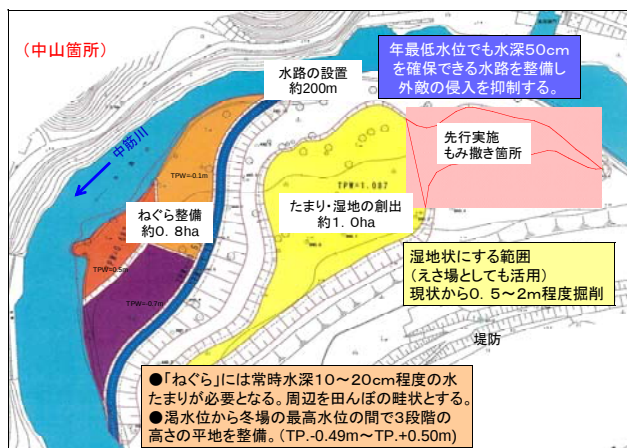


## 2. 2 ツルの里づくり

「ツルの里づくり」は、四万十川周辺に数多く飛来し越冬していたツルが、餌となる2番穂の減少や、ねぐらの消滅などにより、最近ではほとんど越冬が見られなくなっていることから、国際的なツル保護の方針や地域活性化の取り組みとも一体のものとして、ねぐら及びえさ場を整備しツルの越冬

できる環境を再生・保全していくものである。

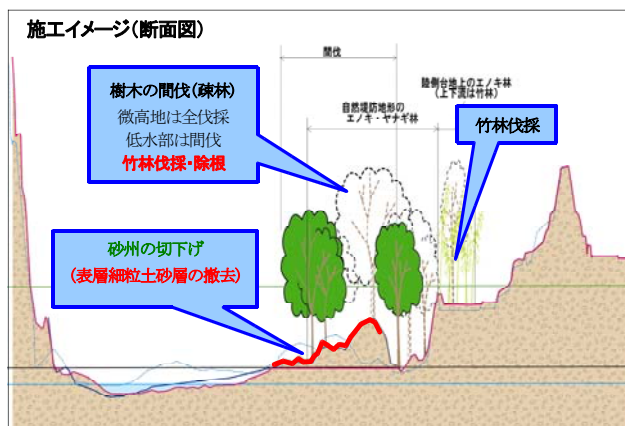
現在、四万十川支川中筋川の河川内に約0.8haのねぐらが完成しており、たまり（湿地及びえさ場）も今年度完成予定である。また、餌となる小魚などを増加させるため、川と堤内地との行き来を遮断している樋門を改良（魚道設置、水深の確保など）し、河川とその周辺とを連続させツルのえさ場の拡大を図る工事も合わせて実施する。



## 2. 3 アユの瀬づくり

「アユの瀬づくり」は、四万十川では砂利採取やみお筋の固定化による深掘れと砂州部の固定化及び樹林化が進み、アユの産卵場となる瀬が減少していることから、樹林化した砂州の樹木伐採・間伐と河床の切り下げにより洪水時に攪乱されやすい河床状況とし、自然のダイナミズムによって白い砂州とアユの産卵場所となる広い瀬を回復させようとするものである。

平成16年度に試験施工を実施したところ、平成17年の増水により白い砂州と、瀬の拡大が確認された。これを踏まえ、「アユの瀬づくり」については樹林化した樹木の伐採・間伐を行うと共に、樹木の間等に堆積した表層の細粒土を撤去することにより、再樹林化を抑制する。そして、樹木伐採の効果の検討や河床の変動状況などをモニタリング調査し、その結果を踏まえ、次の段階として堆積している砂州を切り下げる予定である。現在、四万十川入田箇所において、モニタリング調査を行いながら樹木の伐採・間伐及び堆積土砂の撤去を実施している。



## 3. 1 地域との連携

事業の実施にあたっては、地域との連携、学識者等の支援が不可欠であり、「四万十川自然再生協議会」、「四万十川の里づくりの会」等の団体と協働で取り組んでいる。

### 3. 2 四万十川自然再生協議会

「四万十川自然再生協議会」（事務局：中村河川国道事務所）は、平成14年11月7日に四万十川の豊かな自然を守る為、流域住民が主体となり、意見、提案、活動を行うことを目的として発足した会で、NPO、漁業関係者、区長会、流域住民各団体など約80団体で構成されている。

活動内容としては、カヌー清掃、たこあげ大会、四万十水辺88箇所の選定、自然観察会など流域住民の参加による自然保護活動を行っている。

「自然観察会」は、「四万十川自然再生事業」の推進など、「四万十川の豊かな自然環境を守り保全しよう」との主旨により、広く一般市民に参加を呼びかけ、植物や野鳥などを中心に観察などを行い関心を持つことで、四万十川の自然環境の保全と河川事業への理解と支援の輪を広げていこうとするものである。これまでに17回開催し、延べ550名の参加者があり、地域との連携が広がってきている。今後も季節やテーマに応じ実施していくものである。



カヌー清掃



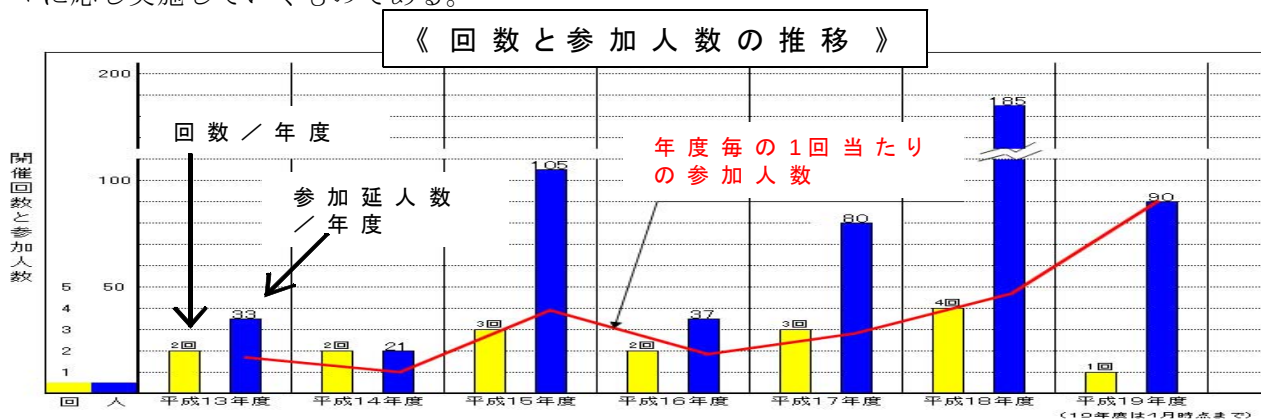
四万十川自然観察会



四万十水辺88箇所選定



タコあげ大会



また、「アユの瀬づくり」を実施している四万十川入田地区において、環境省レッドデータブック（平成12年7月刊行）で絶滅危惧Ⅱ類に挙げられている「マイヅルテンナンショウ」の全国最大規模の自生地が確認され、四万十川自然再生協議会において対応を協議し、伐採は中止し地域が一体となって守っていくこととなった。そこで平成18年7月、記者発表を行うと共に、四万十川自然再生協議会において自然観察会を行い一般の住民に周知し保護をお



マイヅルテンナンショウ

願いしたところ、大勢の参加者があり関心が高かった。また、試験的にマイヅルテンナンショウの移植を行うことにし、平成18年12月に自然観察会として一般の方々に協力を頂き地中のイモを採取し移植を実施した。平成19年4月には移植したイモから芽が出て来たことから、自然観察会を開催して一般の方々にも入田地区の樹林等の環境なども合わせて保全に協力をしてもらっている。

移植作業



### 3. 3 四万十つるの里づくりの会

「四万十つるの里づくりの会」（事務局：中村商工会議所）は、平成18年3月に四万十市中筋平野に飛来するツル類等野鳥の越冬地とその周辺の自然環境の保全、整備を促進し地域の活性化を図ることを目的として発足したものである。地元地区長、有識者、四万十川自然再生協議会、四万十市、国土交通省、学校関係、観光協会等が団体会員及び個人会員として参加している。

活動内容としては、鳥類保護のお願い看板の設置、チラシの作成・配布、体験学習会、ねぐら・えさ場確保のための休耕田調査など河川周辺の環境整備を行い、ツルの誘致及び地域活性化にを図っている。また、これらの活動が農林水産省の農村自然再生活動高度化事業のモデル地区に指定され指導を受けながら活動を行っている。

体験学習会では、自然再生事業の「ツルの里づくり」において実施した湿地再生箇所の一部に、ツルの餌となるようモミ撒きを行った。平成18年7月に地元の小中学生が、ツルが来て食べられるようにとJAの提供によるもみを3,000m<sup>2</sup>の湿地に撒いた。平成18年12月には、7月に撒いた

体験学習会（モミ撒き状況）



体験学習会（稲の観察）



モミが順調に成長した稲の観察や周辺へのモミ撒きを行うと共に、鳥類保護の看板の設置を行った。

### 4. 今後の進め方及びまとめ

四万十川自然再生事業は、その地域の自然環境を再生する取り組みを通じ地域活性化にも貢献しようとするものであり、地域の人々の理解と協力がなければ実施は困難である。事業実施にあたっては、植物や動物などの専門家の意見を聞くと共に、地域住民の方々の考えや要望を聞き、理解と協力を得るために「四万十川自然再生協議会」や「四万十つるの里づくりの会」などの地域団体と協働で活動やイベントを行い、連携していくことが重要である。そうすることにより、四万十川のより良い自然の再生及び地域活性化にも貢献できるものと考えている。